日本スポーツ社会学会会報

Vol. 39

Sport Sociology

【 目 次 】

・日本スポーツ社会学会第 14 回大会のご案内 … 1
・〈研 究 会 情 報〉国際シンポジウム「危機にあるオリンピック」 … 4
・〈海外学会報告〉2004 Pre-Olympic Congress … 6
・〈特集〉アテネ・オリンピック　レポート … 12
・平成 16 年度前期理事会議題及び報告事項 … 20
・編集委員会報告 … 24
・研究委員会報告 … 26
・事務局からのお願い … 27
・編集後記／事務局住所 … 29

日 本 ス ポ ー ツ 社 会 学 会

日本スポーツ社会学会第 14 回大会のご案内

Japan Society of Sport Sociology

事務局　京都教育大学　　2004 年 11 月

Ⅰ. 大会概要

◆期　日　　2005 年 3 月 28 日(月)・29 日(火)

◆会　場　　**筑波大学大学院･東京キャンパス**　(東京都文京区大塚 3-29-1)

◆アクセス方法

東京メトロ丸ノ内線『茗荷谷』駅下車　徒歩３分

※大会事務局では、交通・宿泊に関する斡旋は行いません．各自、旅行代理店のホテルパックなどをご利用ください。

◆参加費　**正　会　員　５，０００円（締切日以降は６，０００円）**

学　生　会　員　３，０００円

懇　親　会　５，０００円

◆大会事務局　早稲田大学スポーツ科学部**スポーツ社会学研究室内**

Tel; 04-2947-6914　Fax 04-2947-6724

E-mail;　yt29sport@aoni.waseda.jp

※学会大会ＨＰを 11 月中旬に立ち上げる予定です。

アドレスなどの詳細は、別途封書にてご案内申し上げます。

スケジュール ※変更になることがあります

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
28日			理事会	受付	一般発表	企画・バズセッション			総会	懇親会	
29日		一般発表			昼食	一般発表	課題研究				

◆企　画　　**＜オリンピックをスポーツ社会学の言葉で語りあかそう！〉**

今年は新しいことにチャレンジします。参加者全員が「自分にも話させてほしい！」という欲求を満足できる方式はないだろうか･･･と企画委員一同、知恵をしぼりました。

そして、**バズセッションというグループ学習方式**を採用することに決めました。

バズセッションは、グループディスカッションの結果を全体会に持ち寄り、全体会の結果をみて、再びグループディスカッションをし、その結果を再度全体会に持ち寄り、参加者の意見や考え方の全体像を集約して描き出そうとするものです。

グループは若手世代グループ、中堅世代グループ、熟年世代グループの 3 グループそれぞれ 8 人程度のチームを編成する予定です。テーマは「オリンピック」にしました。3000 年の歴史を持つ世界的な現象としてのオリンピックを日本のスポーツ社会学者はどのような言葉で表現するか、皆さんと一緒に考え、ワイワイガヤガヤとグループワークを楽しみましょう！

詳しくは後日、学会大会ホームページをご覧ください。

Ⅱ．大会参加・一般研究発表申し込み

大会に参加される方、研究発表される方は、期日までに以下の手続きにしたがって申し込みをして下さい。

〔申し込み手続き〕

① 「第 14 回大会参加・発表申込書」(11 月中旬郵送予定)に必要事項を記入の上、学会事務局宛に郵送、ファックスでお送り下さい。第 14 回大会ホームページから申し込むこともできます。

② 申込みと同時に、郵便振替にて大会参加費を大会事務局の口座までご送金下さい。

・大会参加・懇親会　　10,000 円（学生会員 8,000 円）

・大会参加のみ　　5,000 円（学生会員 3,000 円）

※締切日以降の申し込みは 1,000 円割り増しになります。

申し込み締め切り　２００４年１２月１８日（土）

Ⅲ．発表抄録集原稿の提出

研究発表される方は、抄録集に掲載するための原稿を以下の要領で作成し、期日までに大会事務局まで送付してください。

◆書式

・ Ａ４用紙２枚、縦置き、横書き、１枚当たり 40 字×50 行の 2000 字（論題、発表者氏名、所属を含む）で、上下左右の余白を 20mm取ってください。

・ 論題、発表者氏名、所属を原稿の冒頭に入れてください。それぞれの下に英語表記を入れてください。

◆発送方法

・ ワープロソフト等を使用して原稿を作成し、プリントアウトしたものを、厚紙等で保護した上、郵送してください。第 14 回大会ホームページからも送ることができます。

・ 大会ホームページおよび電子メールで送付する場合は、**Microsoft Word** で作成した文書を添付して送信してください。

※ 送付された原稿をそのまま抄録集として印刷しますので、完成原稿をお送り下さい。

原稿提出締め切り　　２００５年１月３１日（月）

※ 期日までに提出されない場合、抄録集に掲載されません。

Ⅳ．発表に関する注意事項

① 個人研究の発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。

② 研究発表は発表 20 分、質疑応答 10 分です。ただし発表者数によって変更があります。

③ 発表の際に使用する機器（プロジェクター、VTR）については、申し込みの際に明記してください。

④ 当日、発表資料を配布する場合は、各自 70 部以上を持参してください。

国際シンポジウム「危機にあるオリンピック：複数の経験・複数の政治」開催のお知らせ

清水　諭（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

2004 年 12 月５日（日）に筑波大学大塚校舎（地下鉄茗荷谷駅下車）で COE 国際シンポジウム「危機にあるオリンピック：複数の経験・複数の政治」を以下のプログラムで開催します。多くの方のお越しをお待ちしております。お越しくださる方は、お手数ですが、石坂までメイルでご連絡ください（ishizaka@taiiku.tsukuba.ac.jp）。よろしくお願いします。

COE 国際シンポジウム
「危機にあるオリンピック：複数の経験・複数の政治」
「Olympics in Crisis: Discrepant experiences and politics」

日程：2004.12.5(日)
場所：筑波大学大塚校舎（地下鉄丸の内線茗荷谷駅下車）ほか
Body Culture Studies 研究会主催

【シンポジウムのねらい】

2004 年８月、オリンピックは、休戦運動が展開されたものの戦争が継続される中、NATO 軍による軍備と監視体制の強化によって変貌したギリシアの都市アテネに 108 年ぶりに帰郷した。莫大な経費、ドーピング、噴出する民族あるいは国家間の対抗関係、氾濫するロゴ、メディアにおける過剰な物語など、多くの問題を抱えながら４年後には北京に移動する。

ここで改めて、私たちが身体文化をめぐってモザイク状に編み込まれた人種、ジェンダー、ナショナリティ、（ポスト）植民地主義、そして資本主義といった「政治的なるもの」を個々人が経験する中で、移動し続けるオリンピックを問う必要がある。
なにげなく見ていたオリンピックを、そしてオリンピックに対するさまざまな言説を問い直しながら、身体を拠り所とする複数の政治性について考えてみよう。

【プログラム】

１０：３０～１２：００〔G501〕

基調講演(Keynote Lecture)

「危機にあるオリンピック：2004 アテネから」(Olympics in Crisis: Report from Athens)

清水　諭(筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻)

「オリンピックと（複数の）文化：1904 年人類学デーとそのアクチュアリティ」

(Olympic Sport and the Cultures: A Case from 1904 and its Actuality)

Henning Eichberg(Research Institute for Sport, Culture and Civil Society, Denmark)

コメンテーター：有元　健（ロンドン大学ゴールドスミス校社会学部博士課程）

コーディネーター：伊藤　守（早稲田大学教育学部）

１３：３０～１５：００〔G501〕

シンポジウム　『オリンピック・人種・ジェンダー』(Olympics・Race・Gender)

鈴木慎一郎（信州大学人文学部）

小笠原博毅（神戸大学国際文化学部）

田中東子（早稲田大学教育学部）

コーディネーター：清水　諭(筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻)

１５：３０～１７：００〔G501〕

ワークショップ『アジアから考えるオリンピック』(Thinking Olympics from Asia)

「オリンピックに関するアジアのパースペクティヴ」

Lee Jong-Young (University of Suwon, ISCA Korea)

「'88 ソウル・オリンピック、'02FIFA ワールドカップ、そして記憶の政治」

Hwang Seongbin（立命館大学産業社会学部）

コメンテーター：田仲康博（沖縄国際大学・琉球大学）

コーディネーター：阿部潔（関西学院大学）

１９：００～２０：３０〔場所未定〕

「'36 ベルリン・オリンピックとキンシャサの奇跡のはざまで」

(Between '36 Berlin Olympics and Miracles in Kinshasa)（映画上映＋トーク）

伊藤守（早稲田大学教育学部）

山本敦久（筑波大学大学院博士課程体育科学研究科）

コーディネーター：石渡雄介（東京都立大学大学院博士課程都市科学研究科）

〈海外学会報告〉2004 Pre-Olympic Congress

伊藤克広（神戸大学大学院総合人間科学研究科）

アテネ・オリンピックに先立つ 2004 年 8 月 6 日から 11 日まで，ギリシアのテッサロニキで 2004 Pre-Olympic Congress が開催された．今回のオリンピックではこのテッサロニキにおいて，男子サッカー予選の日本対パラグアイ戦，女子サッカーなでしこジャパン決勝トーナメントの対アメリカ戦が行われた．テッサロニキはギリシア第 2 の都市で，人口は約 80 万人であり，古来より商業都市として栄えてきたという．街の雰囲気は非常にゆったりとしており，人々も気さくで陽気な印象を受けた．街なかにはビザンティン帝国時代の建物や遺跡が残っており，世界遺産に登録されているギリシア正教の教会もあった．そして，街の中心には中央市場があり，魚，肉，野菜，民芸品，衣服などを扱う商店が所せましと軒を重ね，生活必需品はここで揃うといった感じであった．また，通りには無数のカフェがあり，夜になるとタベルナ（ギリシア語で食堂の意味）が至る所に開店し，夜 10 時を過ぎた頃から人々がタベルナに集まり始め，12 時頃までワインやビールを傾けていた．

Pre-Olympic Congress は，テッサロニキ大学哲学学部をメイン会場とし，世界各国から約 1500 名が参加して行われた．そして，今回は特に中国からの数多くの参加者が目立った．次回オリンピックは北京ということもあり，視察を兼ねての参加ということであった．

まず，初日 6 日にはオープニング・セレモニーがあり，組織委員会会長，ICSSPE 会長らが挨拶され，IOC 会長ジャック・ロゲ会長からの手紙が披露された．その後引き続いて大学内でウェルカム・パーティが行われ，さまざまなギリシア料理が振る舞われた．

2 日目の 7 日から 10 日までは各専門分野に分かれ，研究発表が行われた．日本からは約 30 名の参加があり，スポーツ社会学会からは海老島均先生（びわこ成蹊スポーツ大学），石澤伸弘先生（流通科学大学），金崎良三先生（佐賀大学），松田恵示先生（岡山大学），野崎武司先生（香川大学），坂なつこ先生（一橋大学），高橋豪仁先生（奈良教育大学），山口泰雄先生（神戸大学），山下高行先生（立命館大学），パクヨンキョン氏（神戸大学大学院），乾氏、森山氏（岡山大学大学院），そして筆者が参加した．体育・スポーツ社会学関連のシンポジウムは,“ Mass Media and the Olympic Games ”,“ Social Relations & Identities ”, “ Global / Regional Politics, Sport, and Identities ”, “ Rethinking the Olympics in the New Millennium ”, “ Current Issues in Sports: Developing Countries ”（以上，ISSA），“ Urban Space for Human Movement ”（TAFISA）をテーマとして行われた．そして一般研究発表テーマとして，“Social Aspects of Football ”, “ Gender Issue in Sport ”, “ Olympic Movement ”, “ Various Social Issue on Sport ”, “ Sports Around the World ”, “ Moral Issue in Sports ”,“ Physical Activity, Leisure, Sport ”,“ Sports, Social Policy and Community ” が設定されていた．

山口先生は TAFISA（国際スポーツ・フォー・オール協会）主催のシンポジウムの invited speaker として“ Toward Active Cities: Possibilities of New Sport Culture ”というテーマで発表された．山口先生は，活動的都市に向けた新たなスポーツ文化の可能性を議論することを目的に，世界各国のスポーツ振興政策や日本のスポーツイベント，スポーツ・ボランティアの事例から，新たなスポーツ文化の構成には参加者，観戦者，ボランティアの 3 者が必要であり，スポーツが発展することで社会経済的インパクトや人間の成長をも含んだコミュニティの発展が見込まれると結論づけられた．

一般口頭発表では，“ Sports Around the World ”のテーマのもと松田先生，野崎先生，筆者が発表を行った．松田先生は，スポーツ漫画を通してみられる情報化社会とスポーツ文化の変容との関連について，1960 年代から 90 年代まで 10 年ごとに区切り分析されていた．「巨人の星」，「アタックナンバー1」などのスポーツ漫画やビデオゲームはその時代時代を反映しながら，スポーツは文化へと変容していったことを明らかにしておられた．野崎先生は，世界的スポーツイベントに関する言説分析の点から新興アジア（Emerging Asia）の社会学的意味を明らかにすることを目的に発表された．日本と韓国の英字新聞よりスポーツイベントについて書かれた 320 の記事を分析した結果，メディアは現実とは異なる統一体アジア（one Asia unity）というような物語を作り上げていこうとしているのではないか，スポーツイベントはその傾向に拍車をかけているのではないかと結論づけておられた．筆者は，神戸レガッタ&アスレティッククラブ（KR&AC）を事例に，地域スポーツクラブにおけるシンボルの機能について発表した．KR&AC には数多くの言語的（verbal），行動的（behavioral），物理的（physical）シンボルが存在し，これらシンボルは，「メンバーの KR&AC へのコミットメントを強める」，「メンバーのアイデンティティを高める」，「メンバー間の関係維持」，「メンバーに KR&AC の価値や歴史を知らしめる」といった機能があることを明らかにした．そして，残念ながら日程の関係で 10 日に行われた高橋先生の発表を拝聴することはできなかった．

（発表する筆者）

そして，金崎先生，石澤先生，パク氏がポスター発表を行った．日程の関係で 10 日の金崎先生の発表に参加することはできなかった．石澤先生は，身体活動が高齢者の日常生活に及ぼす影響を調べることを目的に，65 歳以上の女性に対して質問紙調査を行い，スポーツなどのレジャー活動に参加している高齢者は生活満足度が高く，ADL の得点も高いことを明らかにされていた．パク氏は Congress の科学委員会の判定によりスポーツ・マネジメントでの発表となった．パク氏は 2002FIFA ワールドカップ時に設立されたスタジアムのうち，公設民営による神戸ウイングスタジアムのマネジメントと課題を明らかにした．

担当者へのインタビューを行い，神戸ウイングスタジアムは公設民営方式を採用し，年間約 100 のイベントを開催し，イベントからのレンタル料，レストランとスポーツクラブの売り上げ，入場料，グッズ販売などが黒字経営が成り立っている原因であることを明らかにした．ただ本大会で残念であったことは，ポスター発表にキャンセルが目立ったことであった．また，ポスター発表は発表時間が 16:00 から 16:30 に設定されていたが，ポスターは貼ってあるもののその時間に姿を見せない参加者も多数見受けられた．

9 日の夜にはテッサロニキ近郊のヨットクラブにてフェアウェルパーティが催され，ここでもギリシア料理とワインに舌鼓を打ち，舞台ではテッサロニキ大学の学生によるギリシアの伝統音楽とダンスが披露され場を盛り上げた．そして参加者もダンスの輪に加わり夜が更けていった．今回，ヨーロッパ，トルコ，アジアの文化が混ざり合ったテッサロニキでの Pre-Olympic Congress に参加し，昨年の体育社会学専門分科会シンポジウムのテーマであった「多文化共生」を肌で感じることができ，世界各国の研究者，院生と交流することができたことは何ものにも代え難い財産となった．彼らは私の語彙の乏しい片言の英語に耳を傾けてくれ，さらなる努力を積まねばという思いが強まった．今回知り合うことができた方々とは今後もメールなどを通じて連絡を取り合い，知的刺激を受けながら自身の研究の励みとしていきたい．

坂なつこ（一橋大学）

８月６－１１日にギリシャ・テッサロニキ（アリストテーレ大学）で開催されたプレオリンピック・コングレスに、在外研修先のアイルランドから参加した。地中海の国を訪れるのは初めてである。しかも、アテネ・オリンピック直前（ ”Welcome home! ”）、気温 22,3℃のダブリンから 30℃以上のギリシャ（今年は日本のほうが暑かったらしいが）、発表のエントリーをしているわけではない－当然、あまり勤勉な参加者とはいえなかったので、正直なところ「学会報告」をさせていただくのは心苦しい。だから少々紀行風になることは大目に見てもらえればと思う。

ダブリンからブダペスト経由でテッサロキニ入りしたのだが、まず税関で一時間以上も待たされ（なにしろ係員が一人しかいない）、バスでホテルに向かうが英語が通じない。英語の表記がない。私はギリシャ語ができないので、つまりは切符が買えない、どこで降りればいいか分からない。すでにその時点で、本当にこの国でオリンピックという世界最大

のイベントを開催するのか、という感嘆にも似た不安がわき上がってきた。ここ数ヶ月英語ができないことで泣かされることの多い私にとって、「英語が通じないヨーロッパ」はちょっとした「カルチャーショック」であった。しかし、切符の販売機（らしいもの）の前で立ち往生をしていると、誰彼となく無言の指さしで教えてくれる。非言語的コミュニケーションである。バスはたいてい混んでいて冷房はないが、いつも誰か親切にしてくれるのと、ちょっとレトロな雰囲気が気に入って、何度も利用することになった。ついでに言えば、タクシーに乗ったとしても、運転手が「University」という英語を理解してくれるかどうか、また繁華街の「アリストテレス広場」と「アリストテーレ大学」を聞き分けてくれるかどうかは、ギャンブルと同じくらいの確率だったからである（実際、立命館大の山下先生は毎回アリストテレス広場に連れて行かれ、地図で場所を指すと大学近くの墓地に運ばれていったそうだ）。

（受付にて）

さて、学会である。二日目からの参加となったので空いているだろうと思った受付窓口は、期待を裏切って、混乱していた。インターネットで申し込みを済ませていたのにもかかわらず、窓口には何人もの受付の人がいて、コンピュータが何台も並んでいるのにもかかわらず。30 分以上待って突然手招きされ、名前を告げると台帳のようなものを確認してネームプレートとプロシーディングの入ったバックの交換券、ランチ券を渡された。聞くところによると、初日はさらに混乱していたらしい。これが日本だったら殺伐とした雰囲気が漂いはじめてもおかしくないが、なぜか緊迫感とはほど遠い。暑さのせいなのだろうか、いや、アイルランドも似た雰囲気がある。日本がおかしいのだろうか？しかし、再びランチ時の長蛇の列と混乱を目の前にして、また、本当にオリンピックするの？という疑問がわき上がるのである。「Sport Science Through The Age, Challenges in the New Millennium」をテーマとした今回の大会は、International Council of Sport Science and Physical Education(ICSSPE)が主催し、IOC と UNESCO が後援する大きな大会であった。プログラムの領域を数えると 20、報告は 650 組以上（ポスターセッションを除く）、プログラムの厚さは約 5cm、非常に重いが、付属の CD－ROM にプログラムがすべて含まれ、さらに検索までできる。さて、その CD を活用してみると社会学関係だけでも 100 以上の報告があり、国は 26 カ国に渡っている。日本からは 5 組 9 名の報告であり、そのなかには 2002 年ワールドカップに関する韓国との共同研究も含まれている（それ以外にも追加などもあってそれだけは入れられなかったようだ）。Lecture もふくめ、当然オリンピックに関するテーマが幾つかあり、歴史、哲学、あるいはドーピングといったアクチュアルな問題が議論されていた。社会学に限ってみても、報告者の出身も多様であるが、テーマも多様であり、それぞれの地元で固有の課題があることに気づかされる。他方で、スポーツに関わる倫理的課題グローバリゼーションとの関連

など地域を越えて共通の課題も見えてくるのは、国際学会ならではといえよう。そのなかで ISSA が主催する「Global/Regional Politics, Sport and Identities」は、英国の J. Maguire 教授（前 ISSA 会長）が（急遽）司会進行と報告者をつとめ、テーマからも興味を持って拝聴した。ニュージーランドの Steven J.Jackson 氏による「Lost in Translation: Globalisation, Sport Advertising and Cultural Resistance」という最近話題になった映画のタイトルを借り、NIKE のテレビ CM がヨーロッパ各国で放送規制された事例によりグローバル企業広告がうみだす抵抗とその可能性について説明していた。貴重な CM で非常におもしろかったのだが、PC とプロジェクターの調子が悪く結局時間切れで十分な説明を聞くことができずに残念だった。また全体として、それぞれの報告の関連性が理解しにくかったし、グローバルなスポーツの変遷、メディア戦略さらにそれへの抵抗が生じさせるのは分かるが、ローカルな場、あるいは個々人の日常経験（スポーツ経験）がどのようにそれと関わっているのか、あるいはメディアをふくむグローバルな諸力（パワーポリティクス）に対してどのような可能性をもっているのかという点は（「放送禁止」がローカルな抵抗といいうるかどうかも含めて）、あまり浮き彫りになってこなかった。短い時間では仕方ない面があるだろうし、それぞれが興味深い内容だったので続きはやはり各々の論文を読むしかないのだろう。

9 日には、三組の日本からの発表を含む「Sport around the World」と名付けられたセッションが行われた。神戸大からは大学院生の伊藤さんが、神戸の総合型地域スポーツクラブの歴史や旗など様々なシンボルを分析しメンバーへのインタビューも含めて、クラブにおけるアイデンティティ形成の影響についての調査が発表された。香川大の野崎先生は、2002 年の FIFA 韓日大会や釜山でのアジア大会などをとりあげ、元来「西欧」による地名としての「アジア」がアジア自身によりアイデンティティとして生起している状況をポストモダンとの関連での言説分析を発表された。セッションの最後は岡山大の松田先生によるスポーツマンガの歴史的変遷、『巨人の星』『アタックナンバー１』から『タッチ』、さらにスポーツのビデオ・ゲームに至る間に、どのようにメディアは「スポーツのリアリティ」を形成したのかという点を社会状況の変遷とともに捉えた発表であった。かつての「スポーツマンガが現実を写していた」時代から、「現実を構築する」ゲームの時代となったという点は興味深かった。丁度、オリンピック大会中のアイルランドのテレビでは、ゲームの前後にリアルな「オリンピックゲーム」のＣＭがあり（日本でも放送されていたかもしれないが）、このゲームではオリンピックを「自ら体験できる」のである。　また、他の発表ではノルウェーの研究者が Olympiatoppen というエリートスポーツ組織（各協会とは異なる）について、フーコーに言及しながら、調査分析を行っていたのも興味深かった。最後に、印象的だったのは、台湾の研究者による発表で、タイトルの「Baseball and National Identity of The Republic of China」が本来は「Taiwan 's Baseball and National Identity」から変更されたものであるとのことだった。政治とスポーツが（あるいは学問が）無関係ではいられないことをあらわすような出来事であった。全体として非常に活発なセッショ

ンで、熱気にあふれていたのも印象的だった。また、ラフバラー大学の博士課程に在籍している山本さんが通訳補助を引き受けてくれて、発表者の皆さんにとっても心強かったのではないだろうか（もちろんみなさん十分な英語力ではあるが！）。日程の関係で 10 日に行われた奈良教育大の高橋先生の　発表は聞くことができなかった。

クロージング・バンケットが 10 日から 9 日に変更になったので、かつては王様の夏のレジデンツであり現在は公邸という映画のセットに出てきそうな建物でのガーデン・パーティーに参加できた。気の毒なことに局地的な大雨で、用意した屋外のバーベキューや生バンド、ギリシャの伝統的ダンス・パフォーマンスは少し忙しいものとなったが、入道雲も演出効果となり、すばらしいロケーションだった。最も便利だったのは「サイバーカフェ」日本語入力が楽な Windows XP が無料で使用できるのは、非常にありがたかった。またいくつもエクスカーションやエンターテイメントが用意されていて、テニスコートやサッカー場などが使えたそうだ。とにかくすべてが大きな大会であった。

（クロージング・バンケット会場）

個人的には、英語の力不足を痛感させられた大会であった。ここで報告させていただいた内容もつたない英語によるものなので、それが正確かどうか心許ない。今大会で報告していた各先生方は国際学会では毎回と言っていいほど報告していらっしゃり、その意欲に敬服してしまう。他にも多くの日本から参加された先生方や学生の方にお会いできた。この時期のアテネでは相当高額な航空券だったと思われるが、それも厭わない積極的な姿勢は刺激になった。研修期間も半分近くになり、自らの研究とともに英語力、プレゼンテーション力も磨かなくてはと反省するよい機会となった。もちろん、「英語は万能ではない」ということも学んだのだが。

日帰りで猛暑のアテネを訪ね、オリンピックの気分だけ味わい（こちらはオリンピック関係でボランティアの方が大勢いて不便なことはあまりなかった。慣れただけかもしれないが)、ダブリンに戻ると、雨、気温 17℃、思わず「Welcome home!」とつぶやいていた。後日。オリンピック。大会が混乱していたかどうかは定かではない。また残念ながらアイルランドではほとんど日本の金メダルはニュースにならなかった（もちろん、日本ではその逆だろうが)。放送はされていたがその温度差は、北島よりもフェルプス、マラソンより 5000M（オサリバン選手 or マラソンもお隣のラドクリフ選手)、Judo より馬術（アイルランド唯一のメダルで金メダル）といった感じであった。でも、きっとこれだけは日本でもニュースになったのではないだろうかー男子マラソンの大事件を起こした Irishman！

※　筆者は、2005 年 3 月まで University College Dublin, Ireland で在外研修中

〈特集〉アテネ・オリンピック　レポート

オリンピックの古里を訪ねて

金崎良三（佐賀大学文化教育学部）

この夏、ギリシャのテッサロニキで開催された”2004 Pre-Olympic Congress” に参加したついでに、オリンピックの古里２ケ所を訪問した。１つは、古代オリンピックの聖地オリンピア、もう１つは近代オリンピック発祥の地アテネである。学会終了後アテネへ移動し、そこで１泊して翌朝オリンピアへ向かった。

聖地オリンピアへ

ペロポネソス半島の西北に位置するオリンピアの町は、アテネから約 370km 離れており、乗り換えなども含めてバスで約６時間かかる。アテネからの日帰りは無理なので、当地に２泊することにした。オリンピアの町は、人口が 1000 人程度の田舎で、メインストリートにはレストランやホテル、みやげ物店などがずらり並んでいるが、端から端まで歩いても 20 分程度で、本当に小さな町である。ただ観光シーズンには、１日１万 5000 人くらい旅行者が押し寄せるという。

（ギムナシオン）

８月 13 日、オリンピアの遺跡を訪ねた。この日は、アテネ・オリンピックの開幕ということで無料開放されていた。現在の遺跡は、石造りの土台や柱、建物の壁などが残っているだけであるが、これらの遺跡から当時の建造物を想像していくと、なんとすごい文化遺産だろうかと驚かされる。遺跡は、入り口を入ってすぐ右側にまずギムナシオン、その先にパライストラがある。ギムナシオンは、今日のギムナジウム（体育館）の語源となったもので、体育練習場である。パライストラは、ギムナシオンより小さ目の運動場である。遺跡のほぼ真ん中には、ゼウス神殿、その周りにはゼウスの祭壇、ヘラ神殿、反響廊、ネロの家（皇帝ネロ専用の別荘）、ブーレフテリオン（会議場）、レオニデオン（宿泊施設）、テレコレオン（神官宿舎）、プリタニオン（迎賓館）などがある。反響廊の北にある石のアーチをくぐるとスタディオン（競技場）に出る。アーチは、現在残っているのはその一部であるが、古代オリンピックの選手たちはここを通って競技場に入った。スタディオンは、遠くバビロニアでは遥か地平線に太陽が昇り始めてから完全に昇るまでの間に人間が歩く距離を指しているといい、オリンピアでは 192.27m とされている。スタディ

（スタディオン）

オンには、大理石で出来たスタートラインが地中に埋め込まれていて現在も残っている。実際にスタートラインに立ち、地面をかみしめながら歩いてみた。古代の選手たちは、ここでスタディオン走や折り返し走、幅跳び、円盤投げ、槍投げ、ボクシング、レスリングなどの競技をしたのだとの思いを巡らしながら・・。

古代オリンピックでは、競技開始 11 日前から終了までの間、ポリス間の戦闘は一時中止された。いわゆる、平和休戦である。近代オリンピックでは、戦争のために大会が３回中止になっている。古代では戦争を中止し、近代ではオリンピックを中止した。この違いは何だろう。私は、古代オリンピックがゼウスという最高神を祭る祭典競技であり、この宗教的イベントが個々のポリス間の戦闘より優先したのであり、近代オリンピックにはもちろん宗教性はなく、そのため戦争の影響がもろにスポーツ祭典の開催に及んだものと考えている。

大学の講義で学生たちにオリンピアの話もしているが、こうして実際に現場に来てみると、紀元前の時代にこのような建造物と競技場を備え、各種競技を行ったという歴史的事実は、何かとてつもないロマンを感じさせる。古代オリンピックには、選手の他に哲学者や芸術家、彫刻家なども集まったという。観客席―といっても草の生えた土手であるが―に腰を下ろして、しばらくスタディオンを眺めてみた。ひょっとすると今ここに私が座ったところは、かの有名なプラトンも座っていたのではないかなどと空想したりもした。そして、若きクーベルタンがオリンピアの遺跡に異常な関心を示し、その後古代オリンピックの理念をスポーツ実践の指導理念とするようになったのも、遺跡を目の当たりにして肯けることであった。彼が、近代オリンピックの開催に主導的役割を果たしたことは周知のとおりである。

オリンピアはかなり以前から一度訪問したいと思っていたので、ひとしお感慨深いものがあった。また、13 日はアテネ・オリンピックの開幕日ということであろうか、ホテルのテレビでは古代オリンピックの特集をやっていた。古代では、どのようにして競技を実施していたのかなど、幾つかの種目についての解説がなされていた。私にとって、これまでスポーツ史の文献では不明であった競技方法が再現されていて、この番組は大変有意義であった。例えば、折り返し走での折り返しの仕方は、向こうのゴールラインのすぐ外に棒を立てておいてそこを回ってくるのであるが、回るとき当然スピードは落ちる。しかし、現在のようにタイムを測定するわけではなく、誰が１番で誰が２番かといった順位こそが

問題なのであり、スピードは落ちてもよいのである。そんな競技の仕方に、古代らしさを感じた次第である。

アテネへ

８月 14 日、オリンピアを後にしてアテネに戻った。1896 年、第１回近代オリンピックはパナシナイコ競技場で行われた。この競技場は、古代オリンピックのスタディオンにならってトラックが細長くつくられており、コーナーはヘアピンのように急カーブになっている。したがって、現在のトラック競技には使えない。入り口は、まったくのオープンになっており、向かい合う観客席の距離は非常に近い。テレビで御覧になった方もあると思うが、今回のアテネ・オリンピックでは、マラソンのゴールとアーチェリーの会場として使用された。ここは、近代オリンピックの遺産として後世に残ることであろう。

アテネ滞在中、日本対イタリアの野球とバレーボールおよびテニスの試合を観戦した。野球の会場は、Helliniko Olympic Complex という総合スポーツ施設の一角にあり、第１フィールドと第２フィールドの２つがある。プロのみで構成された日本チームの初戦対イタリア戦は、７回コールドで一方的な試合展開となった。この試合は、日本からの応援者が目立った。試合が早く終わったので、すぐにテニスの会場に向かった。地下鉄の入り口やプラットホームには､お揃いのスポーツシャツを着たボランティアの姿が多く見られた。こちらが市内のマップを眺めていると、向こうからどこに行きたいか聞きに来たり、こちらが訪ねたりするととても親切に教えてくれた。テニスの会場は、オリンピック・スタジアムのある会場内にある。ここでは、女子のアーデン（ベルギー）や男子のフェデラー（スイス）といった世界トップクラス選手のプレーを直に見ることができた。テニス競技は午前 10 時からゲームが開始され、これが終わると昼間は実施せず、夕方５時から再開し夜 10 時過ぎくらいまで実施されていた。これは、日中の暑さを避けての運営であろう。

バレーボールが行われた Peace & Friendship Stadium は、天井も高くコートと客席の間も広く、遠くから眺めるような感じであった。選手の安全や運営上の問題もあったものと思われるが、もう少し観客席を近づけてもよいのではと思った。試合の方、日本はイタリアに一方的に敗れた。完全にパワー不足であった。

108 年振りに里帰りしたオリンピックは、私の見た３つの会場ともテロを警戒して警備は厳しく、荷物検査も厳重であった。オリンピック・スタジアムのある会場（Athens Olympic Sports Complex）は、広大で立派であったが土の部分もかなりあり、当日は風が強く砂埃があちこちで舞っていたのには閉口した。本来なら芝生にでもするところであろうが、若干不備な印象を受けた。ともあれ、アテネ市民が何とかオリンピックを平和裏に成功させようとする意気込みは十分感じられた。

さて、今回のアテネ・オリンピックでは、日本選手のメダルダッシュで国内は沸いた。一方、ドーピング問題も相変わらず露呈した。さまざまな問題を抱えつつも、次回北京オリンピックへの戦いは既に始まっている。４年後、どのような大会のドラマが展開されるのであろうか・・。

'04 アテネ・リポートーサロニコス湾からオリンピックを考えてー

清水　諭（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

「108 年ぶりにギリシアに帰郷するオリンピック」の現場をこの目で見たいがために、泊まる場所も決めずに飛行機を予約した。１泊 15 万円以上だと言われていたホテルを探すことなど最初からあきらめ、場合によっては、野犬とマシンガンをもった軍隊に威嚇されながら、街の片隅で寝袋にくるまって夜を明かそうと考えていた。そんななか、つくばと現地とを行き来する人からの情報が飛び込み、アパートの一室を借りることができるようになった。

108 年ぶりの帰郷とはいえ、地中海やエーゲ海などを介して広まっていた古代文明とさまざまな史実、それをふまえた「青い海」への憧憬が、私をアテネに向かわせたように思う。遙かかなたの古代オリンピックを現在進行中のオリンピックという文化現象に重ねて見せようとするトリックは、これまでにも、そしてこれからもオリンピック運動とその大会の時空間的な維持、継続のために用いられていくだろう。しかし、たとえ古代四大祭典が催された地であっても、2004 年８月のギリシアにおいて、オリンピック大会が生み出されるために、さまざまな今日的な「政治」が作動していた。

基地のなかの野球場

2004 年８月 14 日(土)。チケットも無事手に入り、地下鉄を乗り継いで中心街から南にあるヘリニコ・オリンピック会場に女子ソフトボールを観に行く。サロニコス湾に面したこの会場は､同じく海岸沿いにあるいくつもの会場とアクセス可能だった｡しかしながら、ここは現在の国際空港が 2001 年３月にオープンする以前に使用されていた国際空港跡地で、NATO 軍ほか、アメリカ軍の軍事基地を兼ね備えていた。軍用機やパトリオット・ミサイルが配備され、アテネを上空から監視するツェッペリン型飛行船（高性能カメラと空中の化学物質を測定する装備搭載）やヘリコプターの離発着を野球やソフトボール会場の

【ソフトボール会場から見えるパトリオット・ミサイル(2004.8.14.)】

スタンドから簡単に見渡せる。ギリシア人が見向きもしない野球やソフトボールの会場をオリンピック後にどうするのかが問題となっていたことを思い出したが、基地のなかにスタジアムを一時的に作ることで開催にこぎつけたのだろう。当然、テレビ中継では、右中間後方に見えるパトリオットを映すことはなかったが、「平和運動としてのオリンピック」を開催するために、軍事力と警察権力が発揮され、オリンピックの空間を創出している現実がそこにあった。

7月 22 日には、労働者や学生たち数千人によって、NATO 軍の「占領」が批判され、「反オリンピック」デモがアテネ中心部で行われている。そして、人権グループが「市民の日常生活が記録され、人権侵害の恐れがある」（朝日新聞, 2004.8.20.夕刊）と飛行船の運航停止を求めて提訴した。オリンピックや FIFA ワールドカップといったメガ・イベントは、空港や鉄道、そして道路などインフラを整備し、都市の再構築を促す一方で、特に 2001 年９月 11 日以降、「テロの脅威」を掲げて監視（スペクタクル）化の進んだ都市を作り出している。

アテネで生活している毎日、地下鉄に乗るたびに必ず読んでいたフリーペーパー「メトロ」アテネ版（14 万部発行）には、スポーツ社会学会会員である森川貞夫氏の尽力もあって、「オリンピック休戦」広告が掲載された（８月９日）。帝国化が進むなかで、「反オリンピック」「反飛行船」の運動とコラボレートし、オリンピックを契機にして、さまざまな社会運動が実践に向かう道を模索していく必要があるだろう。

女性アスリート・サポーター・「ロゴ」

さて、女子ソフトボール。IOC にとって、野球やソフトボールは、まったくのアメリカンカルチャーで、競技の運営などについては、USOC などアメリカの組織に任せきりなのだろう。会場の売店では、国旗としては星条旗だけが売られ、始球式にブッシュ元大統領、つまり現在の大統領の父親が登場した。野球場でも、イニングの合間やファウルボールが飛んだときなど、メジャーリーグでよく耳にする音楽が流れていた（アメリカの野球チームは、アテネに来ることはできなかったが）。

ツアー応援団などを含んで日本の応援は、約 150 名ほど。会場をその雰囲気で制圧するのに十分な数だ。そのなかで、背中に日の丸のついたオレンジ色の羽織に紺の袴、白はちまき、白手袋の応援団長（日立＆ルネサス高崎の応援団長、男性）が試合前のエールにはじまって、１球ごとに声援を送る。たぶん、実業団ソフトボールのいつもの光景なのだろう。しかしながら、日本の選手は、オーストラリア投手の乱調で２点先行するも、雰囲気が硬く、そしてまったく打てなかった。バントで出塁しようと狙ってはいるが、相手に読まれ、中軸の打者も振れていなかった。２－４でオーストラリアに敗戦。

動きの硬い日本の選手たちに比べ、次に登場したアメリカのショートストップ Natasha Watley（1981 年生まれ、右投げ左打ち）には引きつけられた。トップバッターの彼女は、

俊足を生かしてバントで出塁するや、盗塁でセカンドを陥れ、次打者のヒットや犠牲フライでダイヤモンドを駆け抜ける。その立ち居振る舞いのバランスの良さとスピードは、打撃、走力、守備すべての面でセンスの良さが際立ち、イチローを彷彿とさせた。彼女と三遊間を組む Crystl Bustos（1977 年生まれ、右投げ右打ち）は、クリーンアップの一角を担い、パワーがあってボールを遠くに運んでいた。私はこの三遊間の二人に釘付けだった。

アメリカの選手たちは、しっかりとボールを叩き、いいテンポで投げ、守るというソフトボールに必要な一貫したリズムを各選手の個性に合わせて体得していたと思う。

海岸沿いを走るトラムは、試運転の時から故障続きだったらしく、日本代表のサッカーの応援に来ていたサポーターたちと連れだってタクシーに乗った。道路ができていないために途中から歩いて、バレーボール会場に到着。女子バレーボール初戦、日本対ブラジルを観ることができた。

ゲーム開始直後のサービスをセッター竹下がいきなりバックアウトするや、たちまちブラジルの一方的な展開となった。ブラジルのエース、エリカの打点の高さにどうすることもできない上に、日本の選手たちに硬さがあり、アタックを再三ふかし、サービスミスを繰り返した。

ここでも日本からのツアー応援団がひとかたまりになって応援していた。ワールドカップ・バレーボール会場で見られる２本の空気棒を手に「ニッポン！」（チャチャチャ：正確には「パイン、パイン、パイン」）「ニッポン！」（チャチャチャ）といつもの応援を繰り返した。ブラジルの「サポーター」は、ほとんどが黄色いシャツを着て、ホイッスルを吹きならし、サンバのリズムでずっと身体をくねらせている。そして、得点を重ねるたびにボルテージが上がっていくのだった。

試合は、０－３で日本の完敗。印象的だったのは、ブラジルの選手たちが試合後、ブラジルサポーターのところに歩み寄り、30 分以上も抱き合い、語り合い、そして写真に収まっていたこと。遠征しながらサポーター（もちろん、男性も女性も）と身近に寄り添えるこの雰囲気は、どこから生まれてくるのだろう。

【試合後サポーターと歓談するブラジル・女子バレーボールチーム(2004.8.14.)】

18 時からは、女子サッカー、日本対ナイジェリア。バレーボール会場から道路を挟んだ向かい側のスタジアムだ。ナイジェリア・サポーター約 300 人（ほぼ全員が男性）は、席を離れてはいけないと言う係員の制止など聞かず、次々にゴール裏に集結、キックオフの 30 分以上前から椅子をドラムの代わりに叩き、歌い、叫んで盛り上がっていた。

そうした彼らの身振りに加え、派手な色のシャツに圧倒された。「ロゴ」だ。「BECKHAM」「OKOCHA」「KANU」などイングランドやナイジェリア代表のレプリカにレアルマドリーのもの、さらに NBA チームのロゴ入りシャツ。このほかに「adidas」や「NIKE」、赤や白のノースリーブに「NEW YORK」や「BROOKLYN」といったロゴも見える。こうしたさまざまなロゴに身を包んだ男たちがゴール裏でヒートアップしているのだ。こうしたロゴをまとった身体と集合意識に注目すべきだろう。

【ナイジェリア・サポーターの歓喜(2004.8.14.)】

後半になっても、10 番アキデ（181 ㎝、79 ㎏）を中心にナイジェリアの選手たちは、落ちないスピードを生かしてサイドを攻め上がり続け、ついにゴールを奪う。その瞬間、サポーターの男たちは、ビールをまき、叫び、歌い、踊り出した。そして、けんか。どなりあい、つかみ合い、仲間に制止され、また椅子を叩いて、歌い出す。

ゴールキーパーのデデは、すごかった。再三のピンチを驚異的な反射と身体のバネで救い、試合後、サポーターたちから喝采を浴びた。デデやアキデ、そして彼女を応援しているサポーターたちがどのような生活を送っているのか、ついていきたくなった。

「女レス」こそ

次の日、「長嶋ジャパン」の初戦、日本対イタリアを観戦した。キャンプの向こうに広がるサロニコス湾を見ながら、アメリカンカルチャーとして野球が浸透していったプロセスをパン・パシフィックの地理学のなかで考えなければならないと思う。「長嶋茂雄」こそ、さまざまに絡み合うポストコロニアルな戦後にあって、ナショナルな記号性の多様化と恣意性をパフォーマティヴに暴露し、体現してきたのだ。野球界のトップは、そんな長嶋氏を「ジャパン」に押し込め、病に伏したにもかかわらず、「長嶋ジャパン」を変えることはなかった。

「着たまま洗濯物として干されている」といった感じの乾燥した空気、そして刺すような日差しのアテネから、ねっとりとした８月のつくばに戻ると、時差を感じることなく今度はテレビで観戦した。女子レスリングは、ソフトやバレーやサッカーで観た女性アスリートとその関係者、応援する者たちとの関係性への興味をさらに大きくしてくれた。決勝で勝利して、男性コーチを軽々と肩車してマットの上をうれしそうに歩いた吉田沙保里選手。浜口京子とその父親（その昔、東京 12 チャンネル系でプロレスに登場していたあのアニマル浜口）、さらに母親が、浜口選手の試合とジャッジを通して見せたもの。そして、浜口選手が一言発して、父親の首にメダルをかけたこと。こうした女レスのシーンの数々は、これまでのスポーツ界で作られてきた男性の優位性やその「物語」と明らかに異なった、隠されていた、しかし大きなスポーツへの「文化的パスポート」が存在していることをはっきりと示したように思う。それは、すでに女性たちが気づき、もっていたにもかかわらず、なかなか明確に表面化させてもらえなかったスポーツという文化に対する感覚だと思う。

しがみつくものなどなく、身体を拠り所にして次々に自ら切り開いていく力こそが試されるスポーツという文化にあって、何かがないと先に進めないかのような思考に陥っている人々よりも、アテネで繰り広げられた女性アスリートとその周囲の熱狂に酔い、そして魘された。

2004 年 9 月 26 日

於：筑波大学大学院大塚キャンパス

平成 16 年度前期理事会議題及び報告事項

＜審議事項＞

１）会則の改定（別紙１）

別紙１の会則の改定案が提示され検討した結果、原案通り決定し、総会に附議することとなった。

２）研究紀要の残部の処理について

スポーツ社会学研究の残部が大量にあることから、図書館や個人会員への販売促進、販売ルートのある出版社への移管を視野に入れて、今後の対応を継続して検討する。

３）平成 17 年度学会大会開催地について

名古屋地区において開催する可能性を検討してもらう。

４）会費の徴収について

会費値上げの検討(正会員：7,000 円　学生会員：4,000 円)

- 経費削減が限界である。
- 国際交流などの新規の事業に関しての予算が組めない。
- 研究紀要の年 2 回発行も視野に入れる必要がある。
- 事務局や編集委員会の運営資金が乏しく、手弁当の状況にある。
- 学会大会に十分な補助金が出せない。
- 同程度の学会では、平均的に正会員 7000 円、学生会員 5000 円である。

以上のような状況から、会費値上げについて会員に意見を聴くこととなった。

５）新入会員の承認について（別紙２）

別紙の通り、正会員 6 名、学生会員 10 名、購読会員 1 名、計 17 名の新入会員の申し込みがあり、全員承認された。

６）退会者の承認について（別紙２）

正会員 24 名（退会希望者 6 名、会費未納者 18 名)、学生会員 7 名（会費未納者)、計 31 名の退会が承認された。ただし、会費未納者については再度通告し、本年中に納入がないものを退会とする。また、大会になった場合、再度入会するときにはこれまでの未納分を納入する必要があることを確認した。

７）日韓学術交流協定について

山口国際交流委員長より提案があり、原案どおり承認された。

８）2007 年国際スポーツ社会学会の日本開催について

国際スポーツ社会学会を日本で開催することの可能性を検討するために、ISSA Conference in Japan 検討委員会（2004 年 9 月から 2005 年 3 月まで）を設置することを決定した。委員は松田恵示研究委員長、菊幸一編集委員長、山口泰雄国際交流委員長、リー・トンプソン理事、山下高行理事杉本厚夫事務局長の 6 名である。

＜報告事項＞については、各委員会のページをご覧ください。

別紙１

会則の改定（案）

１．改定案

第６章 編集委員会に関する規定を下記のとおり改定する。

２．改定理由

これまで、編集委員会だけが規定されていたが、研究委員会、国際交流委員会、広報委員会（新たに設置）に関する規定が会則に盛り込まれていなかった。しかし、これらの委員会は本会の運営において重要な役割を担い活動している実態があることから、会則に謳っておく必要があり、第６章を全面的に改定する必要がある。

従　来　会　則	改　　定
第６章 編集委員会 第 15 条　本会の事業のうち、機関誌の編集を行うために編集委員会を置く。	第６章　委員会 第15条　本会の運営を円滑に行うために、次の委員会を置き、理事がその委員長を務める。 １．編集委員会は、機関誌「スポーツ社会学研究」の編集を行う。 ２．研究委員会は、プロジェクト研究や学会大会のシンポジウム等、研究に関する企画を行う。 ３．国際交流委員会は、国際交流に関する事業を行う。 ４．広報委員会は、会報の発行とホームページの運営等、広報に関する事業を行う。 なお、それぞれの委員会は必要に応じて細則を別途定めることができる。

別紙２

平成 16 年度前期新入会員一覧（正会員 6 名、学生会員 10 名、購読会員 1 名、計 17 名）

属性	氏名	所属	推薦者
正会員	香山リカ	帝塚山学院大学人間文化学科	松田恵示
正会員	斎藤文彦	（株）マーキーインターナショナル	松田恵示
正会員	左近允輝一	朝日新聞東京本社広報部	菊幸一
正会員	清水康生	臨南寺東洋文化研究所	杉本厚夫
正会員	豊田正彦	共同通信社　運動部	杉本厚夫
正会員	向田久美子	清泉女学院大学	杉本厚夫
学生会員	稲葉加奈子	筑波大学体育科学系（15 年度学生会員）	佐伯總夫
学生会員	植村真也	滋賀県立大学	亀山佳明
学生会員	木村卓二	一橋大学大学院社会学研究科	坂なつこ
学生会員	楠田健太	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科	杉本厚夫
学生会員	工藤郁夫	筑波大学大学院	松村和則
学生会員	竹村直樹	大阪学院大学高等学校	山口晋一
学生会員	中澤篤史	東京大学大学院教育学研究科	澤井和彦
学生会員	服部直	龍谷大学大学院社会学研究科	亀山佳明
学生会員	松浦一晃	滋賀県立大学人間文化学研究科	杉本厚夫
学生会員	山本ヤーヤ真由美	ラフバラ大学	菊幸一
購読会員	図書館	熊本学園大学	杉本厚夫

平成 16 年度退会者一覧（正会員 24 名、学生会員 7 名、計 31 名）

属性	氏名	所属	理由
正会員	大木昭一郎	慶応義塾大学経済学専任講師	退会希望
正会員	大東貢生	愛知県立大学	退会希望
正会員	大山智徳	大阪外国語大学大学院生	退会希望
正会員	倉重加代	立命館大学大学院社会学研究科研究生	退会希望
正会員	須田直之	立命館大学大学院社会学研究科研究生	退会希望
正会員	関直規	東京大学大学院人文社会系研究科（社会学）	退会希望
正会員	武重雅文	香川県	平成 11 年から会費未納
正会員	柳沢和夫	筑波大学体育科学系	平成 11 年から会費未納

正会員	阿部耕也	静岡県	平成 12 年から会費未納
正会員	児玉克哉	三重県	平成 12 年から会費未納
正会員	高木應光	兵庫県立芦屋高校	平成 12 年から会費未納
正会員	Michael Ehrenreich	茨城県	平成 12 年から会費未納
正会員	庄司興吉	東京都	平成 12 年から会費未納
正会員	伊藤嘉樹	住所不明	平成 13 年から会費未納
正会員	梅津顕一郎	呉大学	平成 13 年から会費未納
正会員	田端教恵	神奈川県	平成 13 年から会費未納
正会員	安永智和	福岡県	平成 13 年から会費未納
正会員	伊達由美	大阪府	平成 13 年から会費未納
正会員	牧野紀子	東京都	平成 13 年から会費未納
正会員	Dylan Weston	住所不明	平成 13 年から会費未納
正会員	小澤博	東京理科大学	平成 13 年から会費未納
正会員	笠木秀樹	岡山県	平成 13 年から会費未納
正会員	加藤信孝	佛教大学社会学部	平成 13 年から会費未納
正会員	北山れいこ	大阪府	平成 13 年から会費未納
学生会員	鄭守皓	仁済大学校　社会体育科	平成 11 年から会費未納
学生会員	浦田八千代	大阪府立枚方市立津田中学校	平成 13 年から会費未納
学生会員	河北健太郎	京都新聞社	平成 13 年から会費未納
学生会員	熊谷正也	住所不明	平成 13 年から会費未納
学生会員	浅川重俊	住所不明	平成 13 年から会費未納
学生会員	江南健志	大阪府	平成 13 年から会費未納
学生会員	大谷昌子	住所不明	平成 13 年から会費未納

編集委員会報告

編集委員長　菊幸一

○編集委員会の体制

菊（編集委員長）、佐伯、亀山、萩原、海老原、挾本、黄、トンプソン

以上８名で昨年度と同様のメンバー

○編集状況

・5 月 15 日（土）第 1 回編集委員会

編集方針、審査手順・スケジュール、特集論文・書評の取り扱い等

・9 月 4 日（土）第 2 回編集委員会

＊投稿論文数…9 本

＊1 本の論文につき、主査（編集委員）1 名、その他の査読者 2 名を決定

・10 月 12 日（火）第 3 回編集委員会

＊査読結果の検討と第 1 回目の総合判定。

（現在、1 回目査読結果に基づき、2 回目の修正原稿を依頼中）

○特集論文、書評等について

・特集論文

オリンピックをテーマにした座談会を企画予定。人選および具体的なテーマについては編集委員長に原案を一任し、編集委員会で決定する。

・特別寄稿論文

旭川大会の Andrew Brooks 氏の講演に基づく論文と関東スポーツ社会学研究会で発表された須藤春夫（法政大学社会学部）氏のテレビ・スポーツに関連した論文を依頼した。

・書評論文

計 6 本の書評論文をすでに依頼し、10 月中旬に締め切る。その後、書評された著者に当該論文の応答を任意に依頼する予定である。著者の応答があれば、今回の書評論文は、[書評―応答]がセットで掲載されることになる。

○広告について

前号掲載の 5 社（杏林書院、不昧堂、世界思想社、大修館書店、創文企画）に依頼予定。ただし、創文企画については、「現代スポーツ評論」にこちらの研究誌の広告を掲載することで相殺する。

○その他

12 巻掲載の特別寄稿論文に関する文献削除の依頼を承認した（13 巻に修正文を掲載する）。

編集委員会から「会員の業績報告」原稿のお願い

スポーツ社会学研究第 13 巻の巻末に、以下の要領で「会員の業績報告」を掲載します。ついては、ワード書式添付ファイルで、下記メールアドレス宛てに、
2005 年 1 月 10 日（月）まで（必着）にご投稿ください。

editor@jsss.jp

1．業績内容は、原則として「スポーツ社会学」分野に関連するものを中心に挙げて下さい（関連する、しないの判断は投稿者に委ねます）。
2．すでに第 12 巻で業績を報告された会員は、今年度 1 年間の業績を報告してください。
3．これまで業績を報告されていない会員は、2001 年 4 月以降（2001 年以降）の業績を報告してください。
4．報告の内容を以下の項目に分けてください。
　１）書籍（分担執筆、編集を含む）
　２）原著論文
　３）翻訳
　４）調査報告書・学会報告
　５）その他
5．書き方は、第 12 巻の「会員の業績報告」欄を参照してください。アルファベット、数字等は半角文字でお願いします。

研究委員会報告

研究委員長 松田恵示

「スポーツと表象」をテーマにした 2 つのプロジェクト研究が、学会大会でのシンポジウム開催に向けて活動を行っています。プロジェクトのメンバー以外にも、各回の研究会はオープンにしておりますので、もしご興味をお持ちの会員がいらっしゃいましたら、下記の担当理事までお問い合わせください。

「スポーツドキュメンタリーを見る」

担当理事　リー・トンプソン（早稲田大学）

〈 thompson@waseda.jp 〉

「スポーツとことば」

担当理事　松田恵示（東京学芸大学）

〈 keiji@u-gakugei.ac.jp 〉

また、前回の会報でアナウンスしておりました、若手の研究者による課題研究のサブプロジェクトを新たに編成することにつきましては、その内容や方法等につきまして継続して検討中です。しばらくお待ちください。

事務局からのお願い

事務局長　杉本厚夫

１．会員の連絡先について

次の会員の方の住所が不明です。ご存知の方は事務局(secretary@jsss.jp)までご連絡ください。

住所不明者リスト　（平成 16 年 10 月 29 日現在）

学生会員	上水研一郎、浅川重俊、大谷昌子、熊谷正也、五香純典、重村敦司、萩野仁美、藤澤貴幸、松井晋右
正会員	赤堀方哉、伊藤嘉樹、Dylan Weston、江口潤、児玉克哉、清和洋子、武重雅文、田端教恵、根上優、Michael Ehrenreich、武笠俊一 安永智和、湯川照代

２．会費納入について

現在の会費の納入状況は下記のとおりです。会費未納の方は至急下記の郵便口座までお振込みいただきますようお願い申し上げます。

加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

口座番号：00390-0-43962

平成 16 年度会費納入状況（平成 16 年 10 月 29 日現在）

	会員数	納入者数	納入者割合
正会員 5000 円	302 名（退会者を除き、新入会員含む）	227 名	75.1%
学生会員 3000 円	97 名（退会者を除き、新入会員含む）	56 名	57.7%
購読会員 3000 円	2 名 9 団体 (団体は 15 年度会費)	2 名 9 団体	100%
賛助会員 20000 円	3 社	3 社	100%

３．メールアドレスの登録について

現在メール登録されてくださっている方は、290 人（72.5%）です。本会からの重要な連絡、緊急の連絡はメールで行っておりますので、まだメール登録されていない方は、至急事務局 (secretary@jsss.jp) までメールアドレスをご連絡ください。

４．バックナンバーの購入について

スポーツ社会学研究は以下のとおり残部がございます。ご購入していただける方は、事務局までご連絡ください。なお、会員の方は定価の 2 割引（1600 円）で購入していただけます。

研究紀要の残数（平成 16 年 9 月 20 日現在）

号数	残数	号数	残数
3 号　1995 年	35 冊	8 号　2000 年	20 冊
4 号　1996 年	35 冊	9 号　2001 年	35 冊
5 号　1997 年	20 冊	10 号　2002 年	180 冊
6 号　1998 年	110 冊	11 号　2003 年	195 冊
7 号　1999 年	60 冊	12 号　2004 年	160 冊

５．図書館などへの購読会員の拡大について

お知り合いの図書館で、スポーツ社会学研究を定期講読して下さるところはございませんでしょうか。もしございましたら、事務局までご連絡ください。

６．会費値上げについて

理事会の報告でも申し上げましたが、来年度からの会費の値上げ（正会員 7,000 円、学生会員 4,000 円）を理事会で検討しております。皆さんのご意見を事務局 (secretary@jsss.jp) までお寄せください。よろしくお願いいたします。

編　集　後　記

今号は、アテネオリンピックの現地リポート、ギリシャで行われた 2004 プレ・オリンピック・コングレスの報告、オリンピックに関する国際シンポジウムのお知らせと、オリンピック関連の話題が多くなりました。また、来年 3 月に東京で開催される学会大会での新企画として、オリンピックについてのバズセッションが予定されているようです。一言居士の会員の方には、魅力的な企画だと思います。

2005 年 3 月初旬に発行予定の会報 40 号にも、新刊情報、海外研究通信、海外学会報告、研究会情報、研究活動通信等の原稿を、どしどしお寄せ下さい。来年 2 月末までにファイルを送って下されば、40 号に掲載させて頂きます。どうぞ、宜しくお願いします。（T.Hide）

◆学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒612-8522　京都市伏見区深草藤森 1　京都教育大学気付

日本スポーツ社会学会事務局　　杉本厚夫【事務局長】

TEL: 075-644-8283　　FAX: 075-645-1734

E-mail: secretary@jsss.jp

（郵便口座番号）00390-0-43962

（加入者名）日本スポーツ社会学会事務局

◆会報への投稿

〒630-8528　奈良市高畑町

奈良教育大学

高橋豪仁【会報担当】

E-mail: doc@jsss.jp

◆学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ

http://jsss.jp